

# 第二言語習得研究における盲点

- 確信度 -

坂本 正\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 第二言語習得研究
  3. 調査方法
  4. 理想的な第二言語の習得状態とは
  5. 日本語指導に生かすには
    5. 1. 「正確さ」と「確信度」を中心にして
    5. 2. 「適切さ」と「確信度」を中心にして
    5. 3. 「適切さ」と「正確さ」を中心にして
  6. 今後の日本語習得研究
- 
- 

## 1. はじめに

母語であれ、第二言語であれ、言語を身につけた、習得したというのはどのようなことを言うのであろうか。母語の場合、我々は生まれて4、5年のうちに母語となる言語をなんの苦労もなしに、いつ覚えたかも分からないが、いつの間にか話せる、聞けるようになっていく。一生懸命動詞の活用を練習した記憶もないし、誰かから助詞「は」と「が」の違いを学んだ覚えもない。ただ周囲の人と交流しているうちに、自然に見つけたのである。明示的なプロセスを一切経ないで、暗示的なプロセスを通して身につけたのである。その証拠に日本語学習者の作文を読んで、文法的に正しいかどうか、適切な表現かどうかは日本語の母語話者は判断できる。しかし、なぜ文法的に正しくな

---

\* 南山大学 教授 日本語教育・第二言語習得研究

いか、なぜ適切な表現ではないかはなかなか言葉では表せない。日本語という言語を明示的なプロセスを経ないで暗示的に身につけたのであるから、明示的にその理由を述べよと言われても暗示的な知識しか有しない日本語の母語話者は明示的に述べられないのである。なぜだか分からないが、文法的に正しくない、適切な表現ではないと正しく判断でき、それもかなりの確信でそう言える。暗示的なプロセスを経て、暗示的な知識を有している母語話者ができるのは確信を持って、文法性、適切性を判断することであろうか。

では、母語ではない第二言語のほうはどうかであろうか。その言語が日常的に話されない環境で学ぶ場合をここでは考えるが、一般に第二言語と初めて接触したのは、早い人で中学、高校で習い始めるが、大学から習い始めるという人も少なくないであろう。日本の場合を考えてみると、英語<sup>1)</sup>は中学から、他の言語の場合は大学からという人が多いであろう。では、中学から英語を学んだとしよう。英語という言語を教室で英語教師に学ぶわけだが、母語を身につけたような暗示的なプロセスとは全く異なり、教師が英語を明示的に体系的に教える。新出単語は母語訳を、文法は構造を分かりやすく分解して、母語で解説し、学習者は英語という第二言語を意識的に学んでいく。文法性判断や適切性判断をさせると、明示的に学習した知識を持って、判断し、なぜそう思うかもある程度言える。しかし、明示的知識があやふやな、不安定なところに関しては、判断しにくくなり、自分の判断に関する確信も持てない。

言語を習得したというのは、ある発話を聞いたり、文を読んだりしたときに、文法的な点からも適切さの点からも確信を持って判断できるということではないだろうか。つまり、文法性、適切性、確信度の三つがバランスよく発達していなければならない。

本論文では、第二言語習得研究の目的に言及し、第二言語習得の研究方法を概観し、文法性、適切性、確信度の三つの要素の関係を考え、理想的な習得に向けて、語学教育者ができることを考えてみたい。

## 2. 第二言語習得研究

はじめに、第二言語習得研究とはどのような研究かを考えてみたい。Ellis (1994)によると、第二言語学習者の言語能力(linguistic competence、その言語に関する内在化された文法、音、意味、語彙などについて正しいと認定する能力)とコミュニケー

1) 今、小学校からの英語教育が始まろうとしている。

ション能力(communicative competence、いつ、誰に、どこで、どのような言い方で話すか、という言語使用の適切さに関する能力)を記述し、どうやってそのような能力を身に付けていくかを説明する研究としている。簡単に言えば、第二言語学習者の有する言語能力とコミュニケーション能力がどのようなものか、またどのようにして学習者はそれらを身につけていくかを研究する学問領域であると言える。

1980年代に入り、日本国内でも少しずつであるが、第二言語としての日本語の習得研究が見られ始め、1990年に入ると、その数も増え、2000年代に入ると、爆発的に研究者の数も、第二言語習得研究を教える大学も増え、学会でも第二言語習得に関する発表が多くなり、少なくとも第二言語習得研究は日本国内では市民権を得たような気がする。

### 3. 調査方法

次に、実際に第二言語習得研究が行われる場合、どのような手法が用いられているのであろうか。大きく言語能力を調べる研究方法とコミュニケーション能力を調べる調査方法に分けられよう。

#### A) 言語能力を調べる研究方法

言語能力が内在化された文法、音、意味、語彙などについて正しいと認定する能力ということからその正確さに関する能力を調べる研究方法である。以下に主な調査方法を挙げ、簡単に解説する。

##### 例、主な調査方法

活用テスト、助詞穴埋めテスト、文完成テスト、翻訳テスト、音声識別テスト、音読テスト、語彙選択テスト、ディクテーション、シャドーイングなど

活用テストは、動詞、形容詞などの活用が正確にできるかどうかを見る。助詞穴埋めテストは、文中に用いられている助詞の中から調べたい助詞を空欄にしておき、そこに適当な助詞を入れさせる。文の構造が正確に分からなければできない。文完成テストは文の前半か後半かが空欄になっているテストで、文の意味理解とある程度の文法知識がないと完成できない。答えはほとんどの他のテストと異なり、複数あっても全体の文の意味が通じればそれでいい。翻訳テストは母語から第二言語へ、または、第二

言語から母語へと意味内容を変えずに翻訳するテストで、正確な語彙力、構文力が要求される。音声識別テストは「だいがく（大学）」と「たいがく（退学）」のようにミニマルペアなどで、語句の一部が異なるものを聞かせて、同音かどうかを判断させるテストである。日本人の英語学習者には識別しにくいLとRの識別テストなどがよく知られている。音読テストは、ある程度の長さの文章を正確に声に出して読ませるテストで、漢字の読みだけでなく、読む時にどこにポーズを置くかで意味内容が正確に掴めているかもわかる。語彙選択テストは、類似語彙などが文章の中で使われているが、文の意味や文脈を考慮に入れて、より適切な語彙を選択するものである。ディクテーションは、教師の言う文章またはテープから流されている文章を聞いて、正確に同じものを書き留めるテストである。短い文であれば記憶だけで書けるであろうが、長い文章になると聞いたものを基にして同じ意味内容の文章を再構成して書くことになり、聞く力だけでなく、正確な語彙、文法力も試される。シャドーイングは、教師またはテープのあとについて、流れて来る発話を影のようにあとから追い掛けて口頭で繰り返す、ついていくものである。単に聞こえて来るものを記憶するだけだと誤解されるが、実は同時通訳者養成の訓練法の一つとしても昔から取り入れられており、聞きながらも少し遅れて頭の中で文を再構築しながら繰り返していることから、かなりの語彙力、文法力が要求される。最近はこのシャドーイングを語学教育に積極的に取り入れている語学教師が増えているように思う。語彙、構文力からアクセント、リズム、イントネーションまでいろいろな言語要素を含んだ、幅広い、総合的な力をつける練習方法であるが、テストとしても活用できる。

## B) コミュニケーション能力を調べる研究方法

コミュニケーション能力がいつ、誰に、どこで、どのような言い方で話すのか、という言語使用の適切さに関する能力であることから、上の正確さに加えて言語運用全体の適切さに関する能力を調べる。ここでも、主な調査方法を挙げ、簡単に解説する。

### 例、主な調査方法

会話テスト、談話完成テスト、作文、スピーチテスト、語用論的な発話意図の理解テスト、タスク遂行テスト、ロールプレイ、眼前描写テスト、ナラティブテスト、視点統一描写テスト、など

会話テストは初級から上級までよく行われるもので、たいていは教師と学習者の二者間で行われることが多い。教師が質問をし、学習者が答える。または、その反対に学

習者が質問をし、教師が答える場合も時にはあろう。現実の接触場面の状況に近づけてのテストで、質問者の質問意図を読み取り、正確さはもちろんのこと適切に答えなければならない。会話能力を測定するOPIも会話テストの一つと見なすことができよう。談話完成テストは、意味的にまとまりのある短い会話文または文章を見せ、適当な長さの空欄があり、全体の流れから考えて、適当な語句や文を書き入れるものである。作文は誰か読み手を想定しての活動であり、文字、語彙、文法の正確さはもちろんのこと、文と文を適切につなぐ接続表現や文体などにも気を付けなければならない、かなり総合的な文字を介した正確な産出能力を求められると言えよう。スピーチテストは書いたものを覚えてきて、話すものではなく、その場で課題を与えられ、その場で数分話すことが要求される。事前に準備できない分だけ口頭能力の実力が出るが、聞き手を意識した分かりやすい、正確で適切なスピーチをするので総合的なコミュニケーション能力が測れると言えよう。語用論的な発話意図の理解テストは、ある状況においてある人がある発話をしたが、それにはどのような発話意図があるのかを調べるテストである。言語以外にも、状況・文脈の把握、人間関係の把握、文化的な知識などを総合的に判断しないと、表面上の言語だけでは発話意図が読み取れない。実際のコミュニケーション場面では、このレベルでのコミュニケーションが行われるので、言語の表面上現れないところの話者の意図を理解する練習は異文化間コミュニケーション上の誤解を防ぐいい練習となるが、このような話者の発話意図を読むテストの開発が今後大いに望まれる。タスク遂行テストは、言語よりも課題遂行の程度を測るテストであるが、TPOを考慮して相手に不快感を与えないように適切に課題を遂行するには、課題遂行の難易にも関わるが、かなりのコミュニケーション能力が必要となる。ロールプレイも会話テストと共通する点も多いが、あるロール（役）を与えられ、そのロールになったつもりで、スピーチスタイルや待遇表現、使用語彙等も適切に選択し、そのロールを遂行しなければならない。これもコミュニケーション能力が問われる。眼前描写テストは教室内で行うのはなかなか難しい。テレビのニュース番組などのレポーターの養成によく用いられるようで、目の前で起こる出来事をなるべく忠実に言語化し、その場にはいない人に分かるように的確にかつ明確に伝えなければならない。学習者を教室の外に連れて行き、一緒に歩き、目の前に見える状況、目の前で起こる出来事を即座に分かりやすく言語描写するという非常に負担の大きいテストであるが、総合的なコミュニケーション能力の一部の口頭産出能力をかなりの程度測ることができる。教室内では、映画やアニメの一部を用い、それを学習者に見せながら、どのようなことが起こっているかをその場で言語描写させるという方法も考えられる。ナラティブテストは、自分の過去の経験を時間軸に沿って、出来事の起こった順番に聞き手に語っていくテストである。共通の出来事でも

どこに焦点を置くかによって、強調点が異なり、学習者の個人差も大きいですが、口頭産出能力を測るのに適している。視点統一描写テストは、映画やアニメの一部や漫画を用い、登場人物を固定し、その人になったつもりで、その人の視点から、何が起きているかを語るテストである。同じ内容でも、視点を置く人物を変えると異なる言語表現（例えば、能動構文から受動構文、授受動詞の変化、「行く」と「来る」の変化など）をしなければならず、かなりの口頭産出能力が要求される

以上、A) 言語能力を調べる研究方法、並びに、B) コミュニケーション能力を調べる研究方法を少し詳しく述べてきたが、A) は主に言語学的な側面を、B) は、言語学的な側面と社会言語文化的な側面の両方を計っているものと言える。

#### 4. 理想的な第二言語の習得状態とは

前節で、主な研究方法について述べてきたが、第二言語の習得という観点を交えて考えてみたい。理想的な第二言語の習得状態とは、言語的な正確さもあり、社会言語文化的な適切さもあり、かつ、心理的には自信、確信を持ってその言語を使えるような状態ではないだろうか。つまり、習得状況を測るには、言語学的な側面、社会言語文化的な側面のみならず、学習者の心的、内的な心理的な側面も含む必要がある。前節で概観したように、これまでの主な研究方法は言語学的な側面と社会言語文化的な側面は計っているが、学習者の心的、内的な心理的な側面を測っているとは言い難い。ここで、心理学的な概念である「確信度 (degree of confidence)」という尺度の導入の必要性を提唱する。「確信度」というのは、学習者の産出した、または、選択した言語表現の正確さや適切さに関して、学習者がどれだけ自信、確信を持って使用、選択しているかという程度を表す尺度である。これまでに、習得研究で確信度という尺度を使った研究もないことはないが、まだ数は少ない。Yule, Yanz, & Tsuda(1985)、Yule(1988)に始まり、その後、Sorace(1988)が、そして、日本では、坂本・大塚(1992)、石橋(1995)、坪根(1997)、鈴木(2005)が確信度を活用した研究を行っている。

第二言語学習者の中間言語は体系的ではあるが、可変性があり、常に目標言語に向かって動いていることから、適切さや文法性の判断も、母語話者と違い、不確定性 (indeterminacy) が高いと言われる。が、目標言語の周辺的な (peripheral) 部分はその可能性が高くても、その核 (core) となる部分はそれほど不確定性があるとは思えない。第二言語学習者の中間言語が発達し、目標言語に非常に接近した時

点では周辺の部分の不確実性も無くならなくても、かなり低くなるのではないだろうか。この点に関しては、まだ筆者の推測の域を出ず、今後の研究を待たないと断定はできない。

では、以下に、「正確さと確信度の関係」「適切さと確信度の関係」「正確さと適切さの関係」を表の形でまとめる。3次元で立体的に作図ができればより分かりやすいと思われるが、二次元の表を3つ作成することでご容赦願いたい。以下の表で◎が付いているところは、正確さと適切さと確信度のどの点から見ても問題がなく、言語習得上、「理想的な状態」と考えられるので、特に言及しない。すべての学習者並びに語学教育者が目標とする状態であると言えよう。

表1 正確さと確信度の関係

		正 確 さ	
		高 い	低 い
確 信 度	高 い	◎	●
	低 い	○	△

- ◎ 理想的な状態
- 目標言語 (L2) の規則の正確さに関する習得は進んでいるが確信があまり持てない状態
- 目標言語 (L2) の規則と異なる規則が固定しつつある状態
- △ あまり規則ができておらず、確信もあまり持てない状態

表2 適切さと確信度の関係

		適 切 さ	
		高 い	低 い
確 信 度	高 い	◎	●
	低 い	○	△

- ◎ 理想的な状態
- 目標言語 (L2) の社会言語文化的な規則はいい方向に習得が進んでいるが、確信があまり持てない状態
- 目標言語 (L2) の社会言語文化的な規則と異なる規則が固定しつつある状態
- △ 目標言語 (L2) の社会言語文化的な規則もあまり進んでおらず、確信もあまり持てない状態

表 3 正確さと適切さの関係

		適切さ	
		高い	低い
確 信 度	高い	◎	●
	低い	○	△

- ◎ 理想的な状態
- 目標言語（L2）の社会言語文化的な規則の習得は進んでいるが、言語的な正確さがあまり進んでいない状態
- 逆に、目標言語（L2）の言語的な規則の正確さは進んでいるが、社会言語文化的な規則の習得は進んでいない状態
- △ 目標言語（L2）の言語的な規則の正確さもあまり進んでおらず、社会言語文化的な規則の習得も進んでいない状態

上記のように、習得の三つの観点、「正確さ」「適切さ」「確信度」、から言えば学習者は様々な状態にいたることが予想される。常に同じ状態にいたるのではなく、調査対象となる項目が異なると学習者が位置する状態も異なる可能性がある。一つ一つの項目によって習得のプロセスが異なっていることも容易に想像される。例えば、ある項目は、△→○→◎というプロセスで習得が進み、ある項目は、△→●→◎というプロセスで習得が進み、また、ある項目は、△→◎というプロセスで習得が進むこともあるかもしれない。これらの具体的な検証は今後の習得研究を期待したい。

## 5. 日本語指導に生かすには

ここでは、第 3 節で見た三つの表の内容と日本語指導との関係を考察し、理想的な習得状態に向けての現実的な対応の仕方を模索する。

### 5. 1. 「正確さ」と「確信度」を中心にして（表 1 参照）

◎の「理想的な状態」については言及しないが、他の○、●、△の状態にある学習者に対する日本語指導を考えてみたい。

#### 1) ○の位置にある学習者に対して

○の位置にある学習者は、言語的な「正確さ」は高いが、あまり自信がなく「確

信度」は低いという学習者の場合である。この状態にある学習者は、その言語項目に関しては正しい方向に習得が進んでおり、正しく用いているわけだが、それを学習者自身が正しく用いているという認識をあまり持っていないので、教師は学習者が正しく用いているということをしっかり学習者に知らせて、自信を持ってその言語項目を使うように励ます必要がある。恐らく確信が低いという状態は学習者の顔の表情とかイントネーションから教師は大抵は分かると思われるので、教師は注意して学習者を見守る必要がある。

例、学習者：[自信無さそうに] 田中君、コーヒー、飲みたい？

教師：いいですねえ。上手に「～たい」が使えましたね。

## 2) ●の位置にある学習者に対して

言語的な「正確さ」は低いが、「確信度」が高い●の状態には、学習者は自信を持って間違った言語形式を学習者の中間言語のシステムに構築しつつあるので、その言語形式は間違いであることを学習者に暗示的に、又は、明示的に何らかの方法で気付かせ、言語形式を修正する方向に指導する必要がある。また、その項目に関する口頭練習、作文練習などを意識的に多く行うことも忘れてはならない。

例、学習者：[自信を持って] 田中君、コーヒー、飲みたい？

教師：えっ？飲みたい？もう一度？

学習者：田中君、コーヒー、飲みたい？

教師：そう、飲みたい、ですね。

## 3) △の位置にある学習者に対して

「正確さ」も「確信度」もどちらも低い△の学習者は、学習者はまだ中間言語にその項目に関する規則を構築するところまで至っていない可能性が高いので、言語形式が構築できるように、教師は意識的にその項目に関する練習を数多く行う必要がある。更に、より明示的な説明を加えて、練習を通して構築する言語形式が正しい方向に向かっているか、確認を行う。

例、学習者：[自信無さそうに] 田中君、コーヒー、飲みたい？

教師：飲みたい？「たい」の前の形が間違っていますよ。

学習者：そうですか。「田中君、コーヒー、飲みたい？」ですか。

教師：そうですね。「飲みたい」が正しいですね。「たい」の前には、

動詞「飲みます」から「ます」を取った「飲み」が来ますね。

学習者：ああ、そうでしたね。はい。

以上のような日頃の指導の積み重ねによって、「正確さ」も「確信度」もどちらも徐々についていくのではないだろうか。

## 5. 2. 「適切さ」と「確信度」を中心にして（表2参照）

### 1) ○の位置にある学習者に対して

○の位置にある学習者は、言語使用に関して「適切さ」が高く、「確信度」が低い学習者の場合であるが、最も学習者に対するダメージが大きい「適切さ」が高いので、教師は大いにそれでいいと言って、学習者が自分の言語使用に自信を持つように指導する必要がある。

例、学習者：[自信無さそうに] 先生、コーヒー、めしあがりますか。

教師：いいですねえ。ちゃんと「めしあがります」が使えましたね。

これからも目上の人と話すときは「めしあがります」を使ってください。

### 2) ●の位置にある学習者に対して

最も学習者に対するダメージが大きいのは前述したように「適切さ」である。その人の人格的な評価に関わる危険性があるからである。表2で、「適切さ」が低く、「確信度」が高い場合は、母語としてL2を話す社会、文化においては、好ましくない言語表現を、自信を持って用いているということになり、学習者はL2社会における適切な表現の仕方を学ばなければならない。教師は、どのような言語表現が適切なかを明示的に示し、今までの学習者の言語表現との相違（ギャップ）に気付かせ、今までの言語表現がL2話者にどのような影響を与えているかを知らせ、適切な言語表現を練習させる必要がある。

例、学習者：[自信を持って] 先生、コーヒー、飲みたい？

教師：意味は分かるけど、話している相手は先生だから「飲みたい？」は失礼になりますね。友達ならいいけど、先生の場合には、「めしあがりますか」を使いましょう。

学習者：はい。先生、コーヒー、めしあがりますか。

### 3) △の位置にある学習者に対して

△の位置にある学習者は、「適切さ」が低く、「確信度」も低い場合である。L2 社会における適切な言語表現が分からずに、確信が低いことからややランダムにその表現を使っている可能性があるため、L2 社会における適切な言語表現を明示的に示して、練習させる必要がある。

例、学習者：[自信無さそうに] 先生、コーヒー、飲みたい？

教師：意味は分かるけど、話している相手は先生だから「飲みたい？」は失礼になりますね。友達なら「飲みたい？」でいいけど、先生の場合には、「めしあがりますか」を使いましょう。先生の他にどんな人に「めしあがりますか」を使ったらいいでしょうか。

学習者：そうですね。先輩や会社の上司やお客さんでしょうか。

教師：そうですね！それから、あまり知らない人にも使えますね。自信を持って使ってください。

学習者：はい。

「適切さ」に関しては、形式的な「正確さ」と違い、学習者本人が不適切な言語使用に気付かないことで、相手に嫌な思いをさせてしまう危険性が高く、教える教師は十分、注意を払って、学習者の否定的な評価に繋がらないように意識して、明示的に教える必要がある。「確信度」のほうは、「適切さ」に注意を払い、学習者が意識的に何度も練習、使用していくことで徐々に慣れていくと思われる。

## 5. 3. 「適切さ」と「正確さ」を中心にして (表 3 参照)

### 1) ○の位置にある学習者に対して

○の位置にある学習者は、「適切さ」は高いが、「正確さ」が低い場合である。この場合は、まず適切な言語表現が使われていることをしっかり褒め、学習者に形式的な正確さに注意して、話す練習をする。

例、学習者：先生、コーヒー、めしあげますか。

教師：尊敬語を使いましたね。いいですねえ。

でも、ちょっとまだ形が違いますねえ。

「めしあげますか」ですか。めしあ・・・？

学習者：めしあ・・・？

教師：「めしあがりますか」ですね。「めしあがりますか」

学習者：ああ、めしあがりますか。

はい。先生、コーヒー、めしあがりますか。

## 2) ●の位置にある学習者に対して

●の位置にある学習者は、「適切さ」は低い、「正確さ」が高い学習者である。言語形式的には正確であるが、選んだ表現が当該の状況では適切でないことを学習者に知らせる。学習者の言語表現と適切な言語表現との差に気付かせ、適切な言語表現を練習する。

例、学習者：先生、コーヒー、飲みたいですか。

教師：「飲みたい」の形はいいけど、使う「動詞」がよくありませんねえ。

それから、話している相手は先生だから尊敬語を使ったほうがいいですよ。

「飲みます」の尊敬語は、何でしたか。

学習者：「飲みます」の尊敬語ですか。うーん。

教師：「めしあがります」でしたね。もう一度言ってみてください。

教師：そうですね！

## 3) △の位置にある学習者に対して

△の位置にある学習者は、「正確さ」も「確信度」もどちらも低い学習者である。その場に応じた言語表現がどのようなものであるかを示し、形式的にも語彙の選択的にも注意して、練習をする必要がある。

例、学習者：先生、コーヒー、飲むたいですか。

教師：「飲むたい」ですか？「たい」の前の形が間違っていますよ。

学習者：そうですか。「飲みたい？」ですか。

教師：そうですね。「飲みたい」が正しいですね。「たい」の前には、動詞

「飲みます」から「ます」を取った「飲み」が来ますね。

学習者：ああ、そうでしたね。

教師：それから、相手は先生だから尊敬語を使ったほうがいいですよ。

「飲みます」の尊敬語は、何でしたか。

学習者：「飲みます」の尊敬語ですか。うーん。

教師：「めしあがります」でしたね。もう一度言ってみてください。

学習者：先生、コーヒー、めしあがりますか。

教師：そうですね！

以上、具体的に教室での指導方法を考えて来たが、学習者が一体どこが正確ではないのか、一体どこの部分が不適切な表現になっているのかに気付くような指導を行い、何度も練習し、「正確さ」「適切さ」「確信度」の3要素を十分意識して取り組むことが教師も学習者も大切である。

## 6. 今後の日本語習得研究

これまでは、表面上に現れる、他者が観察可能な外的な正確さ、または、適切さを調べることで習得状況を考えてきたが、確信度という視点がこれまでのほとんどの第二言語習得研究には欠けていた点が盲点であろう。今後は、この学習者自身の言語使用に関する内的な安定の程度を測る確信度という尺度も第二言語習得研究に大いに活用して習得研究を行い、教師は一人一人の学習者が現在位置している状態をしっかり確認した上で、日本語指導を行うべきであろう。習得研究で確信度を使った研究（前出）もあることはあるが、まだまだ数は少なく今後の研究に期待したい。「正確さ」「適切さ」「確信度」の言語習得の3要素を十分考慮した総合的な複眼的な研究、教育が今後望まれる。

### 【参考文献】

- 石橋玲子(1995). 「日本語学習者のテスト問題解答におけるコンフィデンスとセルフ・モニタリング - T S Dを適用して -」 『拓殖大学日本語 紀要』 拓殖大学留学生別科, 5, 88-105.
- 坂本 正・大塚容子 (1992). 「日本語教育と第二言語習得 - 英語話者における一照応形「自分」の習得」 『アカデミア』 文学・語学編南山大学, 52, 17-45.
- Sorace A. (1988). Linguistic intuitions in interlanguage development: The problem of indeterminacy. *Learnability and Second Languages: A Book of Readings* (pp.167-190). Dordrecht: Holland: Foris Publications.
- 鈴木加珠子(2005). 「中国語母語話者における日本語の授受表現の習得」 第二言語習得研究全国大会, 12月11日, 大阪外国語大学
- 坪根由香里(1997). 「「もの」「ことだ」「のだ」の理解難易度調査」 『第二言語としての日本語の習得研究』, 第1号, 137-156, 第二言語習得研究会.

- Yule, G. (1988). Highly confident wrong answering—and how to detect it. *ELT Journal*, 42(2), 84-88.
- Yule, J., J.L. Yanz, & A. Tsuda(1985). Investigating aspects of the language learner's confidence: An application of the theory of signal detection. *Language Learning*, 35(3), 473-488.

## 要 旨

I first reconsider the meaning of language acquisition and mention about what the ideal state of language acquisition would be. Then, I overview the typical methods and tests applied for language acquisition researches so far and find out that most researches have investigated language accuracy and appropriateness, but very few have looked into the internal confidence of the learners. I argue that it is very important for language acquisition researchers to utilize the scale of learner's confidence as well as language accuracy and appropriateness in their studies and also classroom language instruction, since language acquisition is involved in the three major elements - accuracy, appropriateness and confidence.

キーワード：正確さ、適切さ、確信度、習得の3要素、中間言語、不確定性

투 고 : 2007. 2. 28  
1차 심사 : 2007. 3. 10  
2차 심사 : 2007. 3. 31

住 所 : (466-8673) 愛知県名古屋市山里町18 南山大学人文学部日本文化学科  
電 話 :  
e-mail : tadsaka@nanzan-u.ac.jp